



本の修理と保存

林 哲也

I. リテラシーとして普及したい資料保存

本の修理と保存に関する知識・技能は、図書館の現場ですら残念ながらあまり周知されておらず、また、図書館情報学の課程でも、きちんと習得する機会が必ずしもじゅうぶんに確保されていないのではないのでしょうか。他方、所蔵資料のほうは、現に次々に目の前で破損していきます。

紙や糊を始めとする材料の性質・特徴や造本構造の基礎知識が、図書館業界だけでなくひろく一般に常識として普及してほしいと思います。うっかりしていると、善意の利用者が（あるいはことによると職員が！）補修のつもりでセロハンテープや布粘着テープを貼ってしまう場合が実際にあります。利用者には、本を破損したときは自分で修理しようとせずに申し出るよう周知広報しておきたいものです。また、出版業界の人々には、丈夫で長持ちする、破損しにくい本を製作するよう希望します。大手有名出版社でもときとして、こんな材質でこんなに厚くて重い本を造ったらすぐに壊れてあたりまえではないかと言いたくなるような本を平気で発行している場合があります。

「資料保存」というと「かけがえのない貴重な資料を後世に遺すこと」というイメージがあり、自分の勤務先の図書館の蔵書はありふれたものばかりでたいして稀覯なものもないから関係ないとか、あるいは、専門的なことは難しそうで敷居が高いとか感じられるかもしれません。

しかし、資料保存の基本的な考え方は、貴重書以外の一般の資料にも共通に適用すべきコンセプトを種々含んでおり、万人に知っておいてほしい有用なリテラシーです。自宅の個人蔵書にも応用できます。また、書籍に限らず職場の事務文書、パンフレットや広報誌の制作、家庭内で保管する書類や手紙や写真、学校で書いた作文、その他諸々、日常生活のさまざまな場面に役立ちます。あるいは趣味の自家製本で、紙に皺が寄りにくい接着剤としてペーパーセメントを選択したならば「多大な手間と思いを注いで作った本を、しばらく経った後で開けてみたら、全ページ剥がれて黄土色のしみだらけという、無惨な状態になっている」¹⁾ ようなことも避けられるようになります。

II. セロハンテープ

セロハンテープが補修には最低最悪の素材であることについては、図書館関係者でなくとも実例に遭遇する機会が少なからずあるので、あらためて言うまでもないのかもしれませんが、けれどもたとえばいわゆる「メンディング・テープ」²⁾ ならば大丈夫と思われているかもしれず、心配です。本の補修のために開発された商品ならば、一般資料の中期的な補修には使用可ですが、貴重資料にはもちろん貼ってはいけません。粘着テープの染みの除去は（不可能ではないまでも）極めて困難です³⁾。

「セロハンは、一見ビニールのようにですが、実はパルプから生まれた天然素材」「廃棄後は植物と同様に微生物によって分解され土に還ります。焼却時に有害ガスを発生することもあり

ません」⁴⁾。ごみの分類では可燃ごみになりますが、再生紙の原料としてリサイクルする故紙からは除去すべきものとされています。透明セロハンテープは、1930年にアメリカの3M社(Minnesota Mining and Manufacturing Company)のリチャード・G・ドルー⁵⁾(Richard G. Drew)が発明しました。「商品としてセロハン粘着テープが日本で発売されるのは、1935年のことです」「日本での生産を大きく発展させた背景には、G.H.Q.による手紙の検閲がありました」「戦後、日本を占領したG.H.Q.(連合軍総司令部)では、新聞や雑誌はもちろんのこと、手紙の検閲まで行っていました。開封して検閲した手紙を、また封印して届けるのですが、その封印のためにセロハン粘着テープが必要でした。そこで、G.H.Q.はその生産を日紳工業(現在のニチバン)に求めました。1947年(昭和22年)のことです」⁶⁾。

Ⅲ. 文房具

保存に有害な文房具についての留意事項は、文書管理に関する諸家の著作でも一般にあまり言及されていないようです。蔵書資料以外の事務文書、会議や講習会の配布資料についても、資料保存の観点から配慮したいものです。クリップやホッチキスが錆びて紙面を茶色く汚していたり、紙を束ねた輪ゴムが融けて貼り付いていたり⁷⁾の実例を目撃することが、図書館の職場ですら珍しくありません。いつまで保管/保存するつもりかを常に意識して、用途・目的に応じて適切な文房具を使い分けるべきです。ホッチキスやセロハンテープは、短期間で捨てる予定の文書に対してならば使うことも可でしょう。ホッチキスのステンレス針、ステンレスやビニール被覆のゼムクリップも市販されています。使い捨ての用途に限れば、セロハンテープは強靱さにすぐれています。反面、粘着力が強過ぎるため、壁面に掲示物を貼るのに使うと、用が済んで剥がすときに塗料まで一緒に剥がしてしまう場合があります。

Ⅳ. 接着剤の種類と特徴

大切な資料の補修には、デンプン系接着剤(澱粉糊)を使用するのが基本です。貼って乾いた後でも水に浸せば溶けて剥がせるので、以前の補修方法が不適切と判明した場合はまた元の状態に戻すことができる(可逆性)という長所があります。商品としては、たとえば「ヤマト糊」(ヤマト株式会社)、「姫のり」(防腐剤入り、株式会社伊藤伊)などがあります。

和漢古書の題箋^{だいせん}貼りには、防腐剤の入っていない(長期間経過しても黄変しない)生麩糊を使用します。原料は小麦粉で、煮溶かして糊にします。水に溶いただけでは糊になりません。煮溶かした糊は保存がきかず、短期間で使い切らないと黴が生えてしまいます。

化学糊は可逆的ではありません(再度の分解が必要となったとき、水で溶けない)。「ビニダイン」(キハラ株式会社)などのビニール糊は一般図書館の背固めに好適です。ビニール糊は、澱粉糊を混ぜることにより、乾きを遅くして使い易くすることができます。「アメリカの補修のための参考書によく出てくるのはPVA(Polyvinyl acetate adhesive)という化学糊です。酢酸ビニール系のいわゆる白ボンドで、日本でも製本用としてこの種の糊が販売されています。乾いたあと、糊づけ部分に変色することはありません。この糊は接着力が強く固まるのも早く、使い勝手はよいのですが、いったん接着すると元どおりにはがすことはできません」⁸⁾。

Ⅴ. してはいけないこと

どんなことが「やってはいけないこと」⁹⁾なのかを認識することがまず必要です。けれども単に理論を知識として知っているだけではなく、日常のこころがけとして自ら実践しなければ台無しです。図書館内では飲食禁止が通例と思いますが、貸出で自宅に持ち帰られた資料はお茶を飲みながら、あるいは食事中にも読まれているおそれがあります。目録担当者のみなさん(に限りませんが)は、もし自分の席で飲食

する場合は、必ず前もって蔵書資料を机上から安全な場所へ避難させていますか？ 一般図書に貴重資料と同等の細心の注意を過剰に払う必要はありませんが、無用の危険にさらすことは厳に慎むべきです。忙しくて余裕がなかったりデスクの上が散らかっていたため、つい葉代わりに書籍相互を組み重ねたり立体物(鉛筆など)を本に挟んだりしてしまったことのある人はいませんか？ また、貴重な資料を扱う際は、鉛筆以外の(つまりインクを使用するような)筆記具を一緒の机の上に置いてはいけません。

昔は酸性紙の害がまるきり意識されていませんでした。蔵書印を捺した対向ページに朱肉が写らないようにと小さな紙片が挟んであり、けれどもそれが粗悪な酸性紙で接触面を茶色く汚損している事例を古くからの図書館では数多く見かけます。資料のために良かれと意図したつもりがかえって有害だったという典型例といえます。「酸化し易い新聞の切り抜きを、ページの間に挟んではいけない」¹⁰⁾。しおりなどを長期間挟んだままにする場合は、紙質に留意する必要があります。身近な中性紙としては、コピー用紙があります。「1989年フジゼロックスをはじめとする数社が、自社ブランドのコピー用紙の中性紙化を行った」¹¹⁾のです。ただし、なんらかの化学物質を含んでいるおそれもあるので、貴重資料の補修や保存容器の製作¹²⁾には、しかるべき用紙素材を別途調達すべきです。

VI. 読書法

「読書法」や「知的仕事術」の類書には、本に線を引いたり書き込みをしたり、ページを折ったりしながら読むことを勧めているものがあまりにも多く、これを真に受けてか、あるいは何も考えずにか、公共の財産であるはずの図書館蔵書にまでそのような扱いをする利用者があとを絶ちません¹³⁾。利用者のモラルが近年低下しているという論調の報道¹⁴⁾も見受けられますが、線引き・書き込みの被害¹⁵⁾は今もひどいけれども昔からひどかった¹⁶⁾というのが実態では

ないでしょうか。利用者に対する周知・広報の場面では、してはいけないことを列挙する際、なぜいけないのかを解説するとともに、ではどうしたら良いのか(書き込みする代わりにメモをとる、傍線を引く代わりに抜き書きする、付箋を貼る代わりにしおりを挟むなど)、代案を提示したいものです。貼って剥がせる付箋(ポストイット)も本当は粘着材が残留したり紙を傷めたりするので好ましくありませんが、書き込みされるよりはましなので、「返却する際は全部剥がしてください」程度で妥協している図書館が多いのではないかと思います。

読書法の類の執筆者である作家や研究者のみなさんには、傍線引き、書き込みに関し、せめて一般読者をむやみにそそのかさないようにと願わずにはられません。本を物理的に所有したいかどうかは人それぞれの趣味嗜好でもあり、書き込みするかどうかは各人の学習/研究スタイルにもよるので、個人の蔵書に関しては咎め立てもしかねますが、「無意味に本を汚すことはやめたほうがいい」¹⁷⁾でしょう。

本は身銭を切って買わないと身に付かないとか、書き込みできないから「図書館で借りて本を読むのではだめだ」¹⁸⁾と称して読書対象範囲を自らむざむざ狭めてしまうのは無謀な選択だと思います。購入による入手の可能な文献は、出版物全体のうちのごく限られたわずかな部分に過ぎませんから、それだけしか読まずにまともな調査・研究が成り立つとは信じられません。他方、図書館を経由すればたいの文献は読むことができます。新刊書は短いサイクルでたちまち絶版になります。けれども図書館を活用すれば、古書店を含めても入手困難な本を容易に読むことができます。

図書館で借りた本は、期待したような内容ではなかったときは、自分で購入した場合よりも早目に見切りを付けて気軽に中途放棄し易く、かつ、損失感がなくて精神衛生上とてもよろしい。また、通読に適した内容だった場合も、返却期限があるおかげで、それを締切として意識

化することで、より速く読むことができます。人が何事かを達成できるのは締切があればそれで、期限に追われなければ後回し、着手すらしないうまま過ごしてしまうのもよくあることです。今私が書いているこの原稿も、締切がなければ文章としてかたちになることのなかったものにほかなりません。

参考文献

- 1) 田中栞 (東京製本倶楽部). 書籍情報と書評. [引用 2007-08-31].
<http://bookbinding.jp/clbooks.html>
- 2) 小原由美子. 図書館員のための図書補修マニュアル. 東京: 教育史料出版会; 2000. p.6.
- 3) 中塚祐松堂. セロテープ修理の災い: 素人の修復(コラム『修復家の私考』column 5). [引用 2007-08-31].
<http://homepage1.nifty.com/y-nakatsuka/column/column5.html>
- 4) ニチバン株式会社. セロテープ®の世界. [引用 2007-08-31].
<http://www.nichiban.co.jp/stationery/topics/cello/w-index.html>
- 5) ロバート M・ヨーダー [Robert M. Yoder]. 貼りつけ男. リーダーズダイジェスト. 1949; 48 (5): 55-8. [Saturday evening post より要約]
- 6) 日東電工株式会社. 粘着テープの歴史館, 第2章 テープ文化の黎明, 9. セロハン粘着テープ2. [引用 2008-02-15].
<http://www.nitto.co.jp/about/culture/hakubutu/rekishi/r-016.html>
- 7) 「記録史料の保存・修復に関する研究集会」実行委員会編. 記録史料の保存と修復. 東京: アグネ技術センター; 1995. p.214-5.
- 8) 小原. 前掲書. p.28.
- 9) 書物の歴史と保存修復に関する研究会. 本を愛する人のための実践修理講座 初級編 第5回. [引用 2007-08-31].

http://www.npobook.join-us.jp/encyclo/resto_01.html#05

- 10) 武者小路信和. 図書館内部における保存対策: 予防的な対策を中心に. 日本図書館学会研究委員会 (編). 図書館資料の保存とその対策. 東京: 日外アソシエーツ; 1985 (論集・図書館学研究の歩み; 第5集). p.81-95より, p.86.
- 11) 鈴木英治. 資料保存における酸性紙問題: その歴史と現状. 安江明夫, 木部徹, 原田淳夫 (編著). 図書館と資料保存: 酸性紙問題からの10年の歩み. 東京: 雄松堂出版; 1995 (雄松堂ライブラリー・リサーチ・シリーズ; 1). p.84-91より, p.91.
- 12) 岡本幸治. 保存作業ガイド. 増田勝彦, 岡本幸治, 石井健. 西洋古典資料の組織的保存のために: 第1回西洋古典資料保存講習会から(一橋大学社会科学古典資料センター Study series; no.47). 国立: 一橋大学社会科学古典資料センター; 2001. p.26-52.
- 13) 小特集「図書館資料の汚破損: 利用者のモラルと公共財のリスクマネジメント」. 現代の図書館. 2007; 45 (2): 55-86.
- 14) 図書館の本 傷だらけ: 「切り抜き」「線引き」横行. 読売新聞. 2006年12月12日 (火) 夕刊. p.1.
- 15) 諸橋孝一. 図書館で考える道徳: 書き込み被害をめぐって. 東京: 鳥影社; 2001.
- 16) リチャード・ド・ベリー (古田暁訳). フイロビブロン: 書物への愛 (講談社学術文庫; [896]). 東京: 講談社; 1989. p.136-7.
- 17) 呉智英. 読書家の新技術 (朝日文庫). 東京: 朝日新聞社; 1987. p.182.
- 18) 林望. 第十二講 本はすすんで汚すべし. 林望 [著]. 知性の磨きかた (PHP 新書; 003). 東京: PHP 研究所; 1996. p.151-5.